

近畿皮膚科集談会の歴史

第100回近畿皮膚科集談会
会頭 土居敏明（大阪労災）

今年、第100回を迎える近畿集談会の歴史は、約80年前の昭和2年から始まります。昭和30年生まれの私にとっては、大正14年生まれの母親が産まれた頃のことであり、ただ想像するしかない時代のことです。大方の会員の先生にとってもそれは同じことと思われるので、先輩の先生の記録や記事をもとに発足当時のことを再確認したいと思います。

まずは、平成8年の「第89回近畿皮膚科集談会」（主催：河村甚郎先生）のプログラムに掲載された記事から、本会の創設の契機となったエピソードを紹介します。

『近畿皮膚科集談会の思い出』（京大名誉教授 山本俊平先生著）

「近畿皮膚科泌尿器科集談会は小生が京都大学を卒業して皮膚科教室に入局してから、3、4年目頃、年号で申しますと昭和2年頃の出発のように思われます。春であったか秋であったか忘れましたが、気持ちのよい季節のように思われますが、ある日当時阪大の皮膚科泌尿器科の教授である佐谷先生が、木造建物時代の京大皮膚科の2階にあった松本信一先生（京大教授）の御室に立ち寄られよもやま話でもなすっておられ、話がたまたま近畿集談会でもやってみてはどうかと云うことになったのではないかと推察いたします。その当時には、京都では松浦有志太郎先生（松本先生の前の教授）が創設された京都皮膚科集談会があり、大阪には桜根好之進先生（佐谷先生の前の教授）が中心となり日本皮膚科学会大阪地方会が行われておりました。小生が入局した当時には両者の間にはほとんど連絡と云うべきものはなく、お互いに開催日と演題表を交換する程度であったように記憶しております。従って同じ関西におりながら学問的のことで顔をあわせるは日本皮膚科学会総会のときだけであったような気がいたします。

松本先生と佐谷先生との話し合いが一応のところきた時、小生その席に呼ばれ、大変よいことであるから実施する様準備せよとの命令を受けました。小生当時若造でしたが、医局長のような世話役の立場にあったためと思います。電話か何かで京都府立医大の中川先生ともその場で打ち合わされたと記憶いたしますが、中川教授も御賛成のことです。翌日小生が中川先生のところにまいり詳しく申し上げたような気がいたします。要するに三先生の間で話し合って決めて、特別の規則などなく、一年に2回春と秋に適当な日を選んで1回は京都、1回は大阪で開催すること、土曜日の午後だけとすること、京都の場合は府立医大と京大が交互に世話役をすること、大阪の場合は阪大だけが世話役をすること、時によっては、大学以外の病院に世話をしてもらってもよいではないか、こんなことが三先生の間で申し合わせであったと思います。演題の内容などについては特別な取り

決めはなかったと思います。1年に2回お互いに顔を合わせれば親しくもなり、皮膚科学の進歩にながしの貢献をするに相異ないと云ったことが土台でできたと考えてよいと思います。(中略) 戦争中並びに戦後の混乱期には京都集談会も大阪地方会も実施できなかったように記憶いたしますが、この近畿集談会も同じ運命であったのではないかと考えます。(中略)

戦後のある時期になりますと大学の教室の充実ぶりは戦前のようになり、それにある間隔において学問的に力のある病院も出てくるに併行して、大学の医学部や医科大学もその数を増してきました。当然のこととして日本皮膚科学会も盛会になり、出題演目全部を消化しきれないようになりました。その為日本皮膚科学会では東部地方連合会、中部地方連合会、西部地方連合会なるものを作り、総会は当時年1回として全国的に廻りもちとする、これは昔からの習慣に従って春開催されるが、秋には三地方に分かれてそれぞれ地方会連合会をその地域において実施して演題の消化を助けることになりました。現在、実行されているとおりであります。ところが、中部には近畿集談会なるものが続いておるが、それとの関係をどうするかが問題になりました。近畿集談会はやめてしまったらと云う意見もありましたが、折角一応の歴史をもって存在する学術集会であるから、残したいとの意見もありました。結局近畿集談会は存続して、大学と云わず病院といわず適当なところが廻りもちしてお世話をし、中部地方会連合会は日本皮膚科学会の下部組織として、東、西と同じように秋にこれ又廻りもちで開催すると云うことにきまって現在にいたっておるのであります。」(以上、「皮膚科紀要」(昭和48年11月)の記事の復刻版から要点部分を抜粋しました。)

すなわち、昭和2年の春か秋に、京都大学の松本教授、大阪大学の佐谷教授、京都府立医大の中川教授が相談されて、発足されたことがわかります。それを裏付けるように、平成11年の「第92回近畿皮膚科集談会」(主催：小塚雄民先生)のプログラムに掲載された「日本医事新報」第二七五号(昭和二年十一月十二日発行)に以下のような記事があります。

『第一回近畿皮膚科泌尿器科集談會』

「近畿皮膚科泌尿器科集談會は既報の如く去る六日午後一時より京大樂友會館樓上にて開催、開會は二時の筈なりしも演題多きにつき特に一時に繰上げ主催者側として京大松本博士開會の辞を宣べ順次は狂ひしも左記の如き演題につき、各自研究の結果を七分間演術追加討論の三分間には質義少かりしも、自個の研究に就いての意見を概説して参考に供する人もあり、中にも京都府立大學の皮華科長中川靖博士の如きは數次起立して博士が研究につきての報告を述べ凡ゆる問題に如何に精細なる研究を為せるか、その篤學ぶりを發揮したが日曜のことでもあり。遊樂の好季節なりしこととて傍聴者は四十名に過ぎず會としては物寂しかりしも、いづれも篤學者の集まりだけに和氣藹々たる裡に特異の研究は發

表せられ頗る効果を納めた。かくて六時終了席を改め懇親の宴を張り各自懇談八時過散會したが、第二回は阪大に於いて開催の筈。演題左の如し。(以下、33演題のリストは省略)」

非常に時代を感じさせる興味深い記事ですが、記事の中にある「去る6日」が何月なのか明示されていません。この記事には、「日曜のことでもあり」とあるのに山本先生の記録には「土曜日の午後だけとする」と書いていました。そこで、昭和2年のカレンダーを確認したところ、6日が日曜日なのは、2月、3月、11月、土曜日なのは8月のみです。また、記事の中に「京都府立大學」、「中川靖博士」という記載がありますが、正確には「京都府立医科大学」「中川清博士」というのが正しいようで、この記事を鵜呑みにすることもできません。しかし、案外、身近にそれを解決してくれる記載がありました。

『大阪大学皮膚科学教室75年の歩みを顧みて』（阪大名誉教授 佐野榮春先生著）より

「佐谷教授は着任来、京大松本信一教授、京都府立医大中川清教授と相計り、3大学間の学問的交流と親睦をはかる目的で、近畿皮膚科泌尿器科集談会を創立し、昭和2年（1927年）11月6日第1回集談会が京大学友会館で開催された。その後春秋2回、京都と大阪で交互に開かれていたが、戦後中部連合地方会の発足とともに春の1回のみとなった。さらに、泌尿器科の分離に伴い近畿皮膚科集談会と改称されたが、今日に至るまで発足時の3教授の意向通り肩のほらない気楽な会としてユニークな存在を誇っている。」

（以上、大阪大学皮膚科同窓会誌「開講75周年記念」（昭和53年刊）に収載されたものから、要点を抜粋）

最初から、佐野名誉教授にお伺いすればよかったですのですが、第1回近畿集談会は、昭和2年11月6日（日曜日）に開催されたことが再確認できました。80年後にもこの会が存続してほしいと願っていますが、そのときに本会の歴史を調べようとする先生のために、ここに明記しておきましょう。

一方、先日、400回を迎えた大阪地方会は、明治42年（1902年）から始まっているのですが、そのすべての開催日と開催場所が記録されていました。それよりも約20年あとから始まった本会の歴史をまとめるのはやさしいのではないかと思いましたが、残念ながら創設数年後から、昭和30年代までの主催施設や主催者（会頭）を確認できませんでした。なんとか、昭和40年以降の主催施設と会頭のリストをまとめましたので、掲載しておきます。（会のホームページにも「100回のあゆみ」として載せています）

それはさておき、今回、100回を迎えるにあたり、ちょっとした趣向として、創設にかかわった3大学の現役教授とそれぞれの関連病院の部長に座長をお願いしてみようと発案し依頼したところ、皆様、その趣旨にご賛同いただき、ご多忙中にもかかわらず即座にご

快諾のご返事を得ました。片山教授、宮地教授、岸本教授、東山先生、堀口先生、小西先生、改めて、この場を借りてお礼申し上げます。特に岸本教授は、本会と源流を一にする中部支部学術大会を今秋主催されるお忙しい身にもかかわらず、ご助勢いただけますことに一際深いご縁を感じます。

会員の皆様、特に若い先生方、本会のこのような歴史を再確認いただき、年に1回日曜日に、大阪と京都の皮膚科医が一堂に会して、「和氣藹々たる」時間を過ごそうではありませんか。

平成19年6月